令和2年12月1日　読売新聞　朝刊／31面
本学関連記事

遠隔か対面か 大学苦慮

感染対策と教育の質 両立模索

新型コロナウイルス感染拡大が続く中、道内の大学が授業のやり方について頭を悩ませている。今年度の前期授業ではオンラインによる「遠隔授業」が主体だったが、秋に始まった後期授業では、教室で教師と学生が「対面授業」を再開させたところも多かったためだ。感染防止を図りながら教育の質を維持するにはどうすべきか、模索が続く。

北海道大では、5段階ある道独自の警戒ステージが「3」に引き上げられたことを受けて、11月18日に大学の行動指針をレベル「2」に引き上げた。レベル2では、感染拡大防止措置を講じた実験・実習は対面で行えるが、授業はオンラインの遠隔授業が中心。学生の課外活動は全面禁止となる。

北大では今のところクラスター（感染集団）発生が認定される事案は起きていないが、ホームページで個人を特定されないようにした上で感染者が出たことを公表している。

小樽商科大は、道独自の警戒ステージで「4相当」に位置づけられた札幌市との不要不急の往来を控え、飲食場面ではリスク回避の徹底をするよう学生・教職員に通知した（札幌市在住者は除く）。遠隔授業を基本として一部は対面授業を行う、という行動指針のレベル2は維持する。

帯広畜産大も札幌市との不要不急の往来を控え、飲食ではリスク回避の徹底をするよう学生・教職員に通知した。旭川医科大は、学生は札幌市との往来を原則禁止とし、教職員は不要不急の往来を控えるとした。

北星学園大は16日、サークル活動はオンライン（非対面）で実施可能とした。キリスト教の大学のため、昼にチャペルタイム（礼拝）を行ってきたが、前期に引き続いて後期もオンライン配信で行うことにした。

語学で「時差」学生困惑も

北海学園大は教員裁量

北海学園大は、一律に遠隔授業に移行せず、学生の意向に配慮しつつ教員の裁量で対面授業か遠隔授業、あるいはその混合を実施するとの指針を教員に示した。

学生の意向を聞いた人文学部の寺田吉孝教授(66)（ロシア語学）は「通学途中や学内で感染する可能性があり不安という学生がいる一方、対面で授業を受けたいという学生もいる」と話す。ただ、対面授業を続けるには教室の窓を開ける必要がある。「冬は寒くて風邪をひく可能性もあり難しい」と頭を悩ませている。

人文学部2年の高杉妃色（ひいろ）さん(20)は、前期の韓国語授業で、発音もプリントで示されて対面で聞けないなどとても面倒だったという。「同じ札幌にいるのにオンラインだと微妙な〝時差〟を感じた。本当に遠隔授業はやりにくい。語学は対面が基本だと思う。対面を続けてほしい」と話していた。